レポート

REPORT 01 美術セット　飛騨高山に行く

美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展 in 高山

2009年8月2日[日]− 8月30日[日]
飛騨・世界生活文化センター（岐阜県高山市）

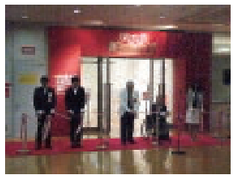
去る今年７月、本学アート＆デザインセンターでは、美術プロデューサーであり、本学音楽学部客員教授の三原康博氏が制作した1980年代のテレビや舞台の美術セットを紹介する「美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展〜ザ・ベストテンから日本レコード大賞まで〜」を開催しました。本学で好評を得た後、展示された美術セットは巡回展として、飛騨高山に行くことになったのです。

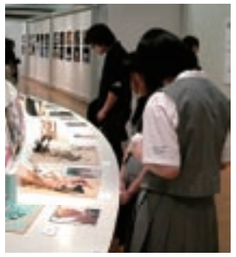
会場となった「飛騨・世界生活文化センター」は、2006年に岐阜県から音楽学部が依頼を受け、「飛騨高山ヴィルトーゾオーケストラ」のライブレコーディングとＣＤ制作したのが始まりで、これまで多くの事業で連携関係にある施設です。「飛騨国際メルヘンアニメ映像祭」で上映される「輪ニメーション」の制作協力も、恒例となっています。そして今回は、はじめてアート＆デザインセンターとの連携事業として、巡回展が実現しました。

「美術セットに見る1980年代ミュージックシーン展 in 高山」は、老若男女、なんと1790名もの飛騨の皆さんに楽しんでいただきました。アンケートの中には「懐かしかった」「タイムスリップした」との声はもちろんのこと、最近では見られなくなった、テレビでの大がかりでスリリングなステージセット制作の過程に驚かれる声が多数ありました。

忘れられようとしていたテレビの良き時代が、小京都、飛騨高山でブームとなったことは確かです。

金子 靖　芸術文化交流室室長





予告

FUTURE EVENT 01 デザイン学部メディアコミュニケーションデザイン&アート展 <MCDdepartment>

2009年11月27日［金］— 12月2日［水］

2008年度よりデザイン学科M＆Cブロックに新設されたメディアコミュニケーションデザインコース2，3年生による初めての作品展です。版画、写真、ドローイング、ペインティング、アニメーション、アートブック…と様々な技法とメディアでコミュニケーションデザイン＆アートワークを展開します。

FUTURE EVENT 02 幼稚園児たちのゲイジツ展

2009年12月4日［金］— 12月9日［水］

附属クリエ幼稚園年長園児たちが版画工房などで制作した版画などを展示します。

※ 12月7日［月］15:00〜16:30、年中親子によるワークショップ開催予定

2009 11-2010 1 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:00−18:00（最終日は17:00まで）日曜祝日休館　**入場無料**　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

11 / 6 金→11 /11 水	GEN 2009学生展「自由落下」ニ幕構成のインスタレーション
11 /13 金→11 /18 水	彫刻AB展
11 /20 金→11 /25 水	遭遇するドローイング;ハノーファーと名古屋 2009 Erwin Legl、佐野祥久、長谷川直美、栗木義夫、片山浩、西村正幸
11 /27 金→12 / 2 水	デザイン学部メディアコミュニケーション デザイン&アート展 ＜MCDdepartment ＞
12 / 4 金→12 / 9 水	名古屋芸術大学後期交換留学生作品展
12 / 4 金→12 / 9 水	幼稚園児たちのゲイジツ展
12 /11 金→12 /16 水	工芸選択コース作品展
12 /26 土→ 1 / 7 木	冬期休館
1 / 8 金→ 1 /13 水	日本画3年作品展
1 /15 金→ 1 /20 水	洋画3年油彩画展
1 /26 火→ 2 / 2 火	AFTER REMISEN#11　柴田麻衣＋平田あすか
1 /26 火→ 2 / 2 火	アトリエコンサート ドキュメント展

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行ー準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神ー宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

B!e Vol.26
発行日　2009年10月30日
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2009　Printed in Japan ©　Art & Design Center, Nagoya University of Arts　デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
B!e
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS　ART & DESIGN CENTER　NEWS　2009. Vol. 26

学芸員実習と博物館

Short-term internship in museums

社会と芸術の橋渡し

本学では毎年7−80名の学生が学芸員資格を取得しますが、そのためには最後に実際の美術館・博物館の現場で行われる「博物館実習Ⅱ」を履修しなければなりません。

わが国の国家資格“学芸員”は、社会教育主事、司書と並び社会教育を担う「博物館法」で定められた専門的職員のことで、学校教育以外の場、すなわち美術館などの博物館において青少年・成人に対して行われる組織的な教育活動を行う専門的スタッフを意味します。

美術館の専門職員の養成は実は各国でずいぶん異なります。例えばアメリカでは国家的資格はなく、一般に美術史などで博士号を取得した学者の卵がさらに美術館においてインターンシップを経験し、美術館の学芸部門の専門スタッフとなります。フランスでは“コンセルヴァトゥール”という国家資格がありますが、大学院修了以上の専門知識を得た人が年間数十人しか合格しない国立文化財学院という高等専門学校に入学して取得する超難関資格であり、高度な博物館運営の知識とスキルを身につけた者に授与されるものです。日本の「学芸員」資格は博物館に関する科目12単位といくつかの専門科目の単位認定を受ければ取得できるものですから、おのずから学芸員資格とともに美術館・博物館の性格も欧米とは異なります。また、研究機関としての側面が強い国立の美術館・博物館ではその取得は義務づけられていません。

かといって“学芸員”の位置づけや役割を軽んじてよいことにはなりません。いうまでもなく学芸員は「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業」を行う専門的職員のことですから、いわば美術館・博物館の心臓部ともいうべき重要な存在です。美術館の目的や使命を達成するのは何よりも現場の学芸員の日夜のたゆまぬ努力によるものです。博物館実習生を受け入れる美術館、博物館ではそういう未来の同志の卵たちをまずは自分たちの仕事の良き理解者＝サポーターとなってくれることを願っています。その一方で最近では、幅広い美術館の業務のうち教育普及の役割が今まで以上に大きくなっており、その分野では芸大出身者こそが力を発揮できる場面も増加しつつあります。

本学の学芸員資格取得の皆さんには、もちろん一人でも多くの人が美術館、博物館の現場で活躍してくれることを願いつつ、ぜひとも社会と芸術の橋渡しをする伝道者としての役割を忘れずに人生を送り続けて欲しいと思います。

栗田秀法　美術学部准教授／西洋美術史、美術館学

学芸員実習と博物館

Short-term internship in museums

卒業研究につなぎ、深める現場へ
目黒区美術館

私は、美術館で実施されているワークショップなどの教育普及活動に興味があり、卒業論文のテーマにも取り上げています。学芸員実習でも教育普及について学びたいと思い、開館当初から活発にワークショップを実施してきた目黒区美術館を希望し、実習に行ってきました。

目黒区美術館の学芸員実習は、一つの展覧会がどのような過程を経て出来上がり、終了するのかを、身をもって体験できるように設定されています。私の実習課題は二つあり、一つはワークショップのスタッフ、もう一つは展覧会の搬出作業となりました。名古屋からの参加となる私は、8月末と9月末の2回に分けて東京に行きました。

展覧会と連動してワークショップが開催されることに定評のある目黒区美術館では、今年の夏は版画集の企画展「線の迷宮〈ラビリンス〉-番外編　響き合い、連鎖するイメージの詩情ー70年代の版画集を中心に」展（8月1日～9月27日）が開催されました。ワークショップも版画を中心としたものが全部で9コース行われ、私はその中でも子どもを対象にしたコースを2つと、家族を対象としたコースにスタッフとして参加しました。

子どもを対象に行われたワークショップ「展示室探検隊～版画を視たり、刷ってみよう!～」は、グループで展示作品を鑑賞するギャラリーツアーを行い、版画作品の特徴に敏感に反応できるようになってから、実際にドライポイントの制作を体験してみるプログラムです。私も補助スタッフとして1グループを受け持つことになりました。一枚の銅版にグループでテーマを決めて構想を練り、削って版をつくります。子どもたちは「夏」をテーマに、うちわやスイカ、扇風機、アイスクリームなど、「夏」から連想されるものを次々と発言しては、銅版に描いていました。版ができたら、次は刷りの作業です。子どもたち自ら版にインクを詰め、プレス機で刷り上げます。実際に刷り上がった作品を見て、笑みを浮かべているのがとても印象的でした。最後は、作品の余白にエディションナンバーとグループ全員のサインを記入し、完成です。

作品をよく鑑賞し、その作品が制作された過程を体験することで、より作品を知ることができる。それが、また作品を見たい、美術館に行きたいというひとつのきっかけになるのだと、改めて感じました。

続いて9月末の実習では、展覧会の搬出作業のお手伝いをさせて頂きました。展覧会が終了した翌日の朝から作品の撤去作業が行われ、私は作品の状態をチェックする作業をしました。作業中には学芸員の方に、支持体が紙の場合の作品の扱い方から、作品の状態をチェックするときに気をつけること、そして額からはずしたからこそ見える、版画作品の細かい描写の美しさについて教えて頂きました。

自らの興味と研究課題を前提に実習館を選び、そうした意向を充分に配慮してもらったおかげで、自分なりの目的を持って実習に臨むことができました。実践的な実習に対して、緊張の連続でしたが、とても充実した実習となりました。

山田敦子　美術文化学科環境創造選択コース４年

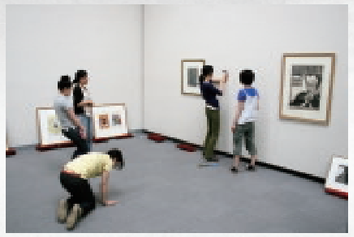
重要文化財も眠る「蔵」に入る
徳川美術館

徳川美術館での実習初日、館内見学で初めて美術品が収蔵してある蔵の中へ入りました。江戸時代、それ以前から受け継がれる品々が眠っている…薄明かりの蔵の中には静かな緊張感が漂っているように感じました。

蔵の中では普段ガラス越しでしか見られないような国宝も間近で見せて頂くこともできました。初めて手に取った刀剣の重さや器の感触が今でも印象に残っています。手動エレベーターで収蔵品を運ぶという体験は徳川美術館ならではだと思います。

蔵の中での体験をはじめ、古美術品の梱包作業や取り扱い講習、収蔵品を扱う学芸員の方々の一つ一つの動作から美術品に対する関わり方を学ぶことができました。

水野愛弓　絵画科日本画コース4年



学芸員の仕事の神髄を実感
愛知県美術館

私が学ぶ美術文化学科は、人と美術の仲立ちとなる人材を養成するコースです。その為学芸員課程である博物館実習は必修ですが、それを抜きにしてでも、体験することが出来て本当によかった五日間でした。

実習先の愛知県美術館の学芸員の仕事である、作品保存の仕方、広報の役割、鑑賞する側が新鮮さを感じられる所蔵作品室の展示の工夫など、目から鱗が落ちるものばかりで、講義で学んだ知識は実習を行うことによって初めて身になるものであることを実感しました。

学芸員の方が丁寧に解説して下さる様子には、作品を伝えるという実感が込められており、画家とは違う表に顔の出ない仕事だけれど、学芸員とは`芸術作品の縁の下の力持ち、だということを認識させられました。自分も美術をわかりやすく伝えられる人間になっていきたいと思いました。

星野 絢　美術文化学科芸術学選択コース４年

故郷の文化に親しみ、実践
鳥取県立博物館

私は夏休みに地元鳥取県に帰省し、鳥取県立博物館での実習を体験しました。この博物館には「自然」「歴史民俗」「美術」の3つの部門があり、私は「美術」部門での実習を受け入れてもらいました。

まず、美術館活動に関する講義を受け、それを踏まえて、実際に収蔵庫の中で作品を触りながら、作品の扱い方を学びました。また、小学生を招いてのワークショップを手伝い、教育普及活動にも参加しました。

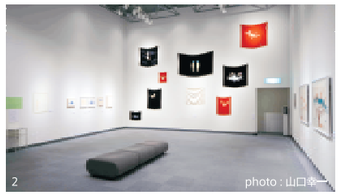
そしてこの実習の締めくくりは、自分で企画展を構想し、企画書を作成して発表するというものでした。私は、地元の書道家である「柴山抱海」という人物の個展を企画しました。資料をもとに作家と作品の特徴をとらえて、展示作品リスト、展示場所での作品配置などを考え、企画書にしました。

このような実践をとおして、学芸員の方が毎回苦労をしながら企画展を考えている事が、身をもって体験できました。

岩谷 渚　デザイン学科デザインマネージメントコース4年

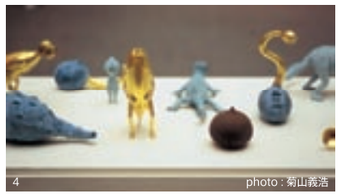
REVIEW　あいちトリエンナーレ2010プレイベント発信！

1

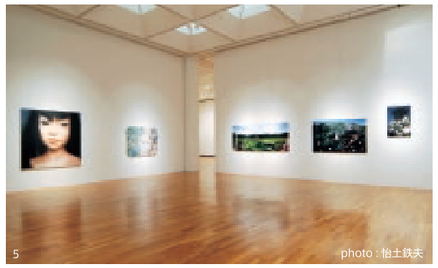


2　photo：山口幸一

3



4　photo：菊山義浩



5　photo：怡土鉄夫

あいち
トリエンナーレ
2010

現代美術の発見Ⅱ　平田あすか「サボテンノユメ」
愛知県美術館　所蔵作品展内 展示室6　2009年6月12日[金]－ 8月16日[日]

うしろの正面　―アーティストたちの誠実な遊戯―
愛知芸術文化センター内各所　2009年8月8日[土]－ 9月23日[水・祝]

放課後のはらっぱ　―櫃田伸也とその教え子たち―
愛知県美術館　　2009年8月28日[金]－ 10月25日[日]
名古屋市美術館　2009年8月22日[土]－ 10月18日[日]

前号の「B!e」25号＜芸術一話＞に登場いただいた建畠哲氏が芸術監督として、準備が本格スタートした「あいちトリエンナーレ2010」。まだまだ一般的な認知度はこれから、といった感は否めないが、3～5月の「アニマルズ in AAC―三沢厚彦の世界」がプレイベントの第一弾として開催され、以後いくつかの企画事業が実施されている。名古屋芸術大学の教員、卒業生や在学生も様々な立場で「プレイベント」に参画しているので、ご紹介しよう。

6～8月には、**平田あすか**（2005年美術学部大学院修了）の個展「**サボテンノユメ**」①②が、筆者（**高橋綾子**）の監修で実施された。2005年末から2006年はじめにかけて滞在したメキシコ・オアハカ州での体験を契機として、画中にいわば"夢の果実"ともいえる「サボテン」のイメージが登場する作品を中心に展観された。メジャー国際展への対照として、地元若手作家の清々しい抜擢が意識された。続いて8～9月は、平田の版画コースの先輩にもあたる**松岡徹**（美術学部非常勤講師）のユニークな立体作品③④が、愛知芸術文化センター地下二階のフォーラム空間に登場。オープンスペース活用を意識した企画「**うしろの正面―アーティストたちの誠実な遊戯―**」において、近作をうまく構成した松岡の編集力に好感がもたれた。

そしてなんといっても出色は、愛知県の誇るべき才能のきらめきが、丁寧に愛情と尊敬をもって展開された「**放課後のはらっぱ　―櫃田伸也とその教え子たち―**」。愛知県立芸術大学が主題とはいえ、ひとりの人間味豊かな作家である教員の存在を軸に、様々な影響と浸透が紡がれた企画は、**杉戸洋**（美術、デザイン学部非常勤講師）の熱意と創意に因るところが大きいという。教え子たち19名のうち、杉戸の他にも本学非常勤講師の**加藤美佳**⑤や**設楽知昭**は独自の絵画世界を提示し、写真工房の**城戸保**も静謐ながら強度のある写真作品を顕示した。また、幻想的なデジタルフォトで定評のある**櫃田珠実**（本学デザイン学部准教授）は作品展示だけでなく、2会場でのワークショップ⑥⑦に精力的に取り組んだ。「はらっぱのつまみぐい」（愛知県美術館）と「はらっぱフォトバッジ、バッチ・グー！」（名古屋市美術館）は、ともに作品鑑賞をしながら楽しくオリジナル缶バッジ作りを体験するもので、メディアコミュニケーションデザインコースの面々がスタッフとして活躍した。

それぞれの企画は「現代美術の普及」という要請を担いつつも、スペクタクルな華々しさとは遠く、むしろナイーブな取り組みだったように感じられた。トリエンナーレへの様々な期待と可能性を臨み見ながらも、観客の存在を大切に、身の丈の発信がなされたのではないだろうか。　※作家名は敬称略

高橋綾子　美術学部准教授

6

ART WORDS FROM THE ART WORLD

テキスタイルデザイナー
2009年度デザイン学部客員教授
脇阪　克二
Katsuji　WAKISAKA

芸術一話　第2話　日本人にとってのアートとは

僕はテキスタイルデザインの仕事をしてきましたが、アートへの関心は常にありました。若いころニューヨークに9年間暮らしたことがあり、美術館やギャラリーを毎日の様に見ていました。そこで感じたのは、それぞれのアーティストが訴えようとしていることが痛い程伝わってくることでした。表現せずにはいられない切実さが、これでもかと迫ってきました。好きなものも嫌いなものもありましたが、西洋社会におけるアートの必然性を強く感じました。独創的な発想に驚き、生きていくことの喜びを味わい、深く考えさせられる問いを突きつけられ、苦しんでいるアーティストの人生をかいま見、共感できる感性に出会い、日常生活で忘れてしまっている心の奥深くにうごめいている、あらゆる感情と向き合う日々でした。20m以上ある壁面に"I AM THE BEST ARTIST"とペイントし、何年間も毎週、新しい色にペイントし直しているアーティストもいました。そのような強烈なエゴの強さは、どのアーティストからも感じました。僕はフィンランド時代も含めて17年間外国暮らしをしましたが、日本人の感性は素晴らしいものがあり、西洋人に何らひけをとるものではありません。しかし、西洋人の中にあるアートというものと、日本人の中にあるアートは違うものであると感じています。日本人には日本人にあった表現の形式があると思っています。それは何かって？それはこれからいろいろ経験していく中で、自分自身で感じ、考えてください。